

十六部ノ經塚トテ、路ヨリ右ニ並テアリ、此塚或ハ頸塚トモ云、又此野ニハ、鶉、雲雀多シ、
〔甲陽軍鑑上品第三十一〕天文二十二年癸丑五月六日、信州桔梗原におひて、小笠原長時衆三千餘騎
出て合戰あり、信玄公の侍大將衆に、甘利左衛門尉、飯富三郎兵衛、馬場民部、春日彈正、内藤修理此
五頭をもつて御旗本はいまだ鹽尻到下を越給ふ時分、巳の刻に一戰をはじめ、然も勝利を得敵
をうつ取、其數六百七十九、雜兵ともに頸をとる、

〔東遊記後編二〕三本木臺。

夫南部の地は、廣大無邊にして、何れの國といへども、此地の廣きに比すべき所なし、誠に七の戸
邊に三本木臺といふ野原あり、只平々たる芝原にて、四方目にさはるものなし、此原東西凡二日
路、南北半日路程ありと云、其間に人家もなく、樹木も一本も見えず、實に無益の野原なり、雪中に
は此邊の人といへども、四方に目印なければ方角知れず、五七日も往來やむ事ありとかや、此外
にも野邊地といふ所より、七の戸迄來るにも、五十丁道四里半ありて、東西は猶廣し、此所も只一
面の芝原也、此原は少し高ければ、四方の山々見ゆる、西ニ八ッ幸田山あり、西南には十三四里を
隔て、三の戸嶽見ゆ、東南は二十里許を隔だて、八ノ戸嶽みゆ、又遙の南五十里隔て、盛岡の
岩鷲山見ゆ、かくのごとく四方豁然として、數百里一望に歸し、廣遠なること大海を望が如し、
〔日本書紀七景行〕十八年六月丙子、到阿蘇國也、其國郊原曠遠不見人居、天皇曰、是國有人乎、時有二神
曰阿蘇都彥、阿蘇都媛、忽化人以遊詣之曰、吾二人在、何無人耶、故號其國曰阿蘇、
〔日本書紀仁十一〕十四年是歲、略中堀大溝於感玖、乃引石河水而潤上鈴鹿、下鈴鹿、上豐浦、下豐浦、四處
郊原以墾之、得四萬餘頃之田、故其處百姓寬饒之、無凶年之患、
〔山槐記〕元曆元年九月十五日辛丑、悠紀史國通、依辨命持來日時、四通占地美名、注文一通、略中

近江國